

第2 教育研究団体の意見・評価

① 日本地理教育学会

(代表者 田部 俊充 会員数 約500人)

T E L 042-329-7729

1 前文

現行学習指導要領に基づく共通テストも2年目を迎えた。すべての高校生にとっての必修科目として本科目は位置づけられているが、今年度の本試験は、前年と変わらず四つの大問で構成されている。また、各大問は四つの問いで構成されており、問いは全体で16と前年と変化はない。問題の特徴として、受験者の思考・判断の力を診断することを意図して地形図や主題図、グラフ、写真、模式図が多用されているものの、それを読み解かなくても、個別的な知識を組み合わせで獲得した複数の概念的な知識をさらに組み合わせることができれば、解答可能な問題が多かったという印象である。基本的には教科書に記載されている事項の範疇で十分解ける問題がほとんどであったといえ、しかも昨年より時間をかけて解かなければならない問題が少なくなり、全体的に易化したといえる（大学入試センター発表による本年度の平均は24.27/50、前年度の平均は21.75/50）。

出題内容については、第1問が「乾燥・半乾燥地域の生活文化の多様性」、第2問が「津軽平野とその周辺地域を事例とした地域調査」、第3問が「日本の自然環境と防災」、第4問が「現代社会における地球的課題と国際協力」となっている。各大問は「地図や地理情報システム（GIS）で捉える現代世界」を除いて、「地理総合」の大項目及び中項目の内容が反映されたものになっているが、いずれの大問も地図・GISの読み取りを通して解答を導き出していく形での設問がほとんどであり、改めてこの大項目が「地理総合」を学習する上での基盤であることを認識させられる。以下、各大問を構成する問いの評価・分析結果について地理教育的観点に立脚した上で言及していきたい。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

第1問（『地理総合、地理探究』と共通のため省略。）

第2問（『地理総合、地理探究』と共通のため省略。）

第3問 日本の自然環境と防災に関する大問である。図の読み取りを通じて、地理的技能や思考力を問う問題となっている。昨年度と同様に4題構成で出題傾向は似ているが、いずれも小地形にかかわる問題であり、大地形にかかわる内容が乏しく出題内容に偏りがあると思われる。4題とも丁寧な図の読み取りが求められており、地理的思考力を測る良問となっている。今年度、昨年度ともに図を用いた問題のみとなっており、航空写真や景観写真、表など、多様な資料を用いることを検討してもらいたい。全体としてはやや易しめの難易度に設定されている。

問1 日本列島の気候要素に関する小問である。図の読み取りから、季節ごとの違いをとらえさせ、問題文にも記載されている気候因子から類推させるという、複数の観点から思考させる良問。2024年度追・再試験『地理A』の第1問の問4、2023年度本試験『地理A』の第1問の問4でも同様の問題が出題されており、過去問の演習を通じて地理的思考力を養うことの意義を感じさせる問題であった。

問2 河川勾配の図から、河川の景観について考える小問である。図を丁寧に読み取り勾配の緩急を把握できれば、容易に判定できる。易しめの問題である。

問3 地理院地図による地形図から、小地形を判定する小問である。等高線や地図記号の読み

取りなどの地理的技能を用いて、容易に判定できる問題。大学受験の問題であることを考慮すると、もう少し地理的思考力を問うなどの一工夫が欲しい。難易度はやや易しめである。

問4 ハザードマップを模した主題図の読み取りを通じて、洪水や高潮への防災について判定する問題。浸水想定区域から原因となる災害をとらえるとともに、避難施設の立地条件について考える小問である。主題図の読み取りを丁寧に行う必要があり、解答に時間を要するが、図5の条件に関する内容から、判断力を測ることができる良問。難易度はやや易しめである。

第4問 現代社会における地球的課題と国際協力に関する大問である。いずれも基礎的な知識をもとに、写真、地図、統計資料を参考に考察を行うものとなっており、難易度は高くない。

問1 エネルギーの消費と二酸化炭素の排出にかかわる小問である。初見の図だという受験者でも、アメリカ合衆国、韓国、フランスについて、各国のエネルギー供給量と二酸化炭素排出量の特徴を押さえれば解くことができる。難易度は高くない。

問2 アメリカ合衆国本土における平均降水量の変化に関する小問である。アメリカ合衆国本土の大まかな農業区分を知らなくても、西部は乾燥しているという基礎的な知識をもとに、図を見ながら解答できる。難易度は高くない。

問3 ジャカルタが直面する課題と対策に関する小問である。2枚の写真から読み取れることをもとにして、文章中の正誤を判断することができる。難易度は高くない。

問4 日本の国際協力活動に関する小問である。三つの世界地図と日系企業の拠点数、日本のNGO団体数、日本のODA供与額の組み合わせを求めるもので、共通テストらしい問い方である。日本と各国・各地域との経済関係や国際協力関係などを考察するため、総合的な思考力と判断力が必要とされる良問である。難易度は高くない。

3 総評・まとめ

前述したように、今回の本試験は教科書で扱われている学習内容を逸脱することなく、「知識・技能」「思考・判断」の過程が重視された共通テストに相応しい平易なレベルの問題であったといえる。多くの小問に見られたように、地図や統計、写真をはじめとするさまざまな資料から地理情報を読み取るためのスキルが重視されている。だがその一方で、資料を読み解かなくても解答が容易にできてしまう問題も散見されていたように思われる。現行学習指導要領のもと、高校現場においては探究プロセスを重視した授業が必須とされているがゆえに、地図や統計などの資料読解を基軸にししながら、「知識・技能」をベースに「思考・判断」の過程を踏まえた地理的な見方・考え方の定着度を診断する試験問題の作成が今後一層望まれてこよう。

4 今後の共通テストへの要望

今回の本試験は、前年と同様、教科書を中心に基礎的事項を学習し、地図帳で世界の概観をおさえ、資料集や統計データ等を用いてさまざまな種類の図表を読み取るためのトレーニングを積み重ねた者にとっては、十分解答可能なレベルであったと考える。一方で、地理総合の科目としての特性ともいえる「課題の発見→要因の分析→解決策の構想」という課題解決を伴う探究プロセスを意識した大問構成や問いについては第2問で見られたものの、それ以外の大問ではそのような配慮がなされているとは必ずしも言えず、問題作成にあたっての今後の課題といえる。

上述したことを踏まえ、授業を含め日頃の学習で養われた物事に対する探究心と知的好奇心を大切にするとともに、「主体的・対話的で深い学び」の成果として身につけた地理的な見方・考え方を、日常生活のさまざまな場面に生かすなど、地道にかつ丹念に学習に取り組んだ受験者の成果が最大限に発揮されるような「良問」の作成を今後も期待したい。

② 全国地理教育研究会

(代表者 小林 正人 会員数 約300人)

T E L 0422-46-4181

1 前文

平均点は 48.54 点 (100 点満点換算) であり、昨年度の 43.50 点 (100 点満点換算) からプラス 5.04 点と上昇した。共通テストへ移行して 6 年目、新課程 2 年目ということもあって昨年を引き続き世間の注目度も高い中、高等学校までの学習内容に沿った問いが多く、「地理総合」は昨年度から大きな出題傾向の変化がなかったという点で、受験者も安心して取り組み、手ごたえも感じられたのではないかと。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

『地理総合，地理探究』との共通問題は、『地理総合，地理探究』の方に記載。

『地理総合，地理探究』との共通問題の出題内容の変更を受けて、第 4 問の「生活文化」が「現代社会における地球的課題と国際協力」となる変更があった。大問ごとの小問数の変化は見られなかった。

平均点は上昇したものの、『地理総合，地理探究』での出題でも成立するような、「地理総合」にしては詳細な知識を背景とする問いや、それなりの授業時間数を割かなければ扱えない内容を含んだ問いが含まれた印象である。公開されている作問の方針には、『地理総合，地理探究』では、「地理総合」で学習したことを基に「地理探究」で学習したことを問うとあり、「地理総合」は基礎・基本的側面を担う科目であることが伺える。何が出題されたかは「地理総合」でもここまで求めるというメッセージにもなるため、この点に関しては再考を願いたい。

第 3 問 「日本の自然環境と防災」 夏と冬で変化する日本の気候や河川，小地形などがバランス良く出題された。防災については、避難施設の立地が取り上げられた。新課程では災害として現れる自然にどのように対処するかということに目が向けられがちであるが、昨年度のように自然から恩恵も受けているという視点からの出題を望みたい。どの問いも資料が精選され、問い方も複雑でなかった点は評価できる。一方で、『地理総合，地理探究』での出題でも成立するものであり、「地理総合」と「地理探究」との違いが不明瞭な印象を受けた。

問 1 日本の夏と冬における降水量と風速に関する問い。太平洋側に上位の地点が多い A が夏，日本側に上位の地点が多い B が冬までは判断できても，暖かい那覇は年中降水量が多く，冬の北海道は雪が多いなどのイメージが先行して，降水量と風速を逆に判断にした受験者もいたのでは。九州が強風地帯となるかで考えを改められれば良かったが，「地理総合」でこの降水量と風速の判断は難易度が高かったようである。

問 2 河川勾配と，その勾配を示す河川の説明の組合せ 6 択問題。資料の読み取りも複雑でなく，説明も簡潔で評価できる。

問 3 地理院地図から切り出された，ある小地形が見られる地域と，その小地形の説明が示され，カルスト地形を判断する問い。資料の読み取りも複雑でなく，説明も簡潔で，「地理探究」であれば易問との評価になるが，「地理総合」でカルスト地形やカールといった小地形まで網羅しなければならないとのメッセージにならないかという点について

ては再考をお願いしたい。正答率も高くはなかった。

問4 洪水と高潮という自然災害に関して、浸水想定区域を示した二つの図がどちらの災害を示したものであるかを判断した上で、○と×で示された避難施設がどの条件に合致するものであるかを判断する問い。まず、浸水想定区域の図の読み取りで苦戦した受験者が多かったと予想される。海や河川など、判断の手がかりになるものをもう少し分かりやすく示しても良かったかもしれない。さらに、同一範囲が示された複数の図を比較参照して、避難施設の条件の合致を読み取る地理的な技能が問われたが、図の比較参照は苦手とする受験者は多い。正答に至るための判断が2段階構えであることや、情報量の多い複数の図の比較参照が求められたという点で難易度は高かった。

第4問 「現代社会における地球的課題と国際協力」 二酸化炭素と温暖化、気候変動と農業、都市問題、日本の国際協力について、バランス良く出題された。一方で、正答の判断にあたって、「地理探究」ではなく「地理総合」でここまで扱っていることを前提にするのは難易度が高いのではないかという問いが複数見られた。第3問でも述べたが、「地理総合」と「地理探究」との違いが不明瞭な印象を受けた。

問1 3か国のエネルギー消費と二酸化炭素排出量の変化についての組合せ6択問題。1人当たり二酸化炭素排出量は3か国の中ではアメリカ合衆国が最も多く、石炭などの化石燃料の使用から再生可能エネルギーの使用を増やしているヨーロッパのフランスで減少していると考えられたか。韓国がここまで伸びていることを手がかりにできた受験者は少なかったと思われる、1991年から2021年にかけて経済成長が見られた、もう少し一般的なアジアの国であれば正答率はもう少し高くできたのではないか。「地理総合」では難しい3か国の組合せであった。

問2 アメリカ合衆国の降水量の変化と農業生産への影響に関する問い。濃淡で示されていることが読み取れば、正答となる下線部の判断そのものは容易。一方で、他の下線部の正誤については、例えばセントラルバレーの農業といったアメリカ合衆国の農業を詳細に扱っている必要もあり、この問いも「地理総合」でどこまで網羅していることを想定しているのか、という疑問が残る側面があった。

問3 途上国の都市問題について、写真と下線部を照らし合わせた正誤の組合せ問題。下線部yに「バスレーンが導入された」とあるが、バス専用レーンはバスの運行当初から設けられていたのか、それとも後に設けられたものなのかは写真からだけでは読み取れず、ジャカルタについての知識がなければ判断できない。そこまで考えずに、「バスレーンの導入」の部分だけで判断して正文と考えた受験者が多かったと思われる、正答率は高かったが、「導入された」ではなく「導入されている」でなければ写真からの読み取りにはならない。下線部の表現について、曖昧な部分が残らないよう留意願いたい。

問4 日系企業や日本のNGO、ODA供与額を示した図形表現図の組合せ6択問題。アメリカ合衆国でNGOやODAが多いとは考えづらく、中国の割合が高いことから、日系企業についての判断は容易。NGOとODAの判断に迷った受験者がいたと思われるが、日本のODAがアジアを対象としたものが多いと学習できていれば正解できただろう。この問は、ODAの対象地域についての学習や知識を問うものであるが、この問の正答率が低かったことを踏まえると、それらが「地理総合」でどの程度扱われていて、受験者がどの程度判断できるかという点について、調整の必要があるかもしれない。

3 総評・まとめ・要望

新課程2年目ということもあり、「地理総合」の出題形式や大問テーマが固まってきた印象である。一方で、前文でも述べたが、『地理総合，地理探究』での出題でも成立するような、「地理総合」にしては詳細な知識を背景とする問いや，それなりの授業時間数を割かなければ扱えない内容を含んだ問いが含まれた。「地理総合」で学習され，よって出題対象としてふさわしい内容について，改めて再考を願う。

こうしたことを背景に，平均点の上昇の割に易化したとの印象を受験者は持ちにくかったと思われる。今年度並みの平均点が維持され，かつ「地理総合」で学習した内容や，身に付けた地理的見方・考え方が問われたという納得感のある作問を期待する。

様々な出題の制約がある中で，ほとんどの小問が片側1ページで構成されるなど，資料の精選や問い方を複雑にしないなどの工夫は感じられた。防災や日本の国際協力といった「地理総合」らしいテーマでの作問も見られ，こうしたテーマを通じて今後も地球上の様々な事象に対して，地理的見方・考え方を養い，事象の意味や将来像を構想させるような「地理総合」の手本となる作問を願っている。